

「戦時における非戦主義者の態度」 — 末永敏事と長谷川周治の場合 —

はじめに

皆様こんにちは。

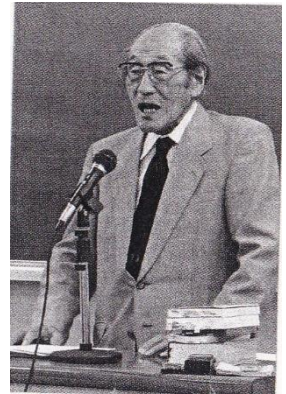
只今「独立伝道会」の会長先生から、平和講演会の趣旨を有難くしっかりと承りました。そのあとで早速このようなことを申し上げなければならないのは申し訳なく思うのですが、申し訳から話を始めます。

今日話をするようにというお話は盛岡の田口宗一様からありました。その時私は直ぐに辞退しようと思いました。というのも、私も少々歳をとりまして、老耄と申しますか、特に言語能力が低下して、話をしても然るべき言葉が出てこない、話の脈絡を失うというようなことがあるものですから、もう公の席では話はしないと決めておりました。

しかし、ちょうどその時に今日話をするようになった末永敏事という人のことが耳に入りまして、この人のことについて是非話をしたい、しなければならないのではないかという気になりました。田口さんに、この人のことについて話すことでもよいかと問い合わせをしたら、それでよいというお答えをいただきましたので、今日此処に立つことになった次第です。そういう訳ですから、話がどこかにいってしまったり、うまく続けられなくなったりすることがありましたら、お許しください。そういうことにならないよう最後まで話をしたいと思い、大体の筋道をそこに3枚書いてきました。手書きのプリントで恐縮ですが、その順番で話して参りますので、ご覧になりながら、お聞きいただければ幸いです。

先程ご紹介いただきましたように、私は山本泰次郎先生の弟子であります。教会に7年ほどおりましたが、なかなか納得できないときに、山本先生の『聖書講義』という雑誌に出会って、先生にお会いするようになりました。以来、私は先生を唯一の師として、「無教会主義のキリスト教」、これは内村の言葉ですが、無教会主義のキリスト教の信仰で生きてきました。

同時に山本先生から内村の非戦論を学びました。ここに持ってきたのは角川文庫ですが、これは山本先生が1953年、内村の『非戦論』と題して出したもので、内村の非戦論に関するエッセイは殆ど全部これに収められています。そしてそれに対する然るべき解説を付けてお出しになりました。私が1951年に先生にお会いして、間もなくの53年に発売されたこの本で、内村の、内村の言葉で言えば、信仰の「内」に対して「外」の問題である平和主義を教えられて、これまで生きて



参りました。

今日はその山本先生を経由して知ることになった二人の人についてお話ししたいと思います。話は個人的な話になり恐縮ですが、お許しいただきたいと思います。

それは2010年のことだったと思います。皆さんの中には会員になっていらっしゃる方も多いと思いますが、私共の仲間で作っている「日韓青年友和の会」があります。これは、私たちが植民地にした朝鮮半島の人々に対する罪責を覚えて、彼らとの間に友好を築こうと願う者の集まりで、主として若い人たちが隔年にそれぞれの国を訪問して、友好を深めていこうとしている団体です。

その団体の2010年の活動として、20人ほどの韓国の、主に大学生や青年が来日しました。代々木の青少年センターでその歓迎会が開催された時、2人の年配のご婦人がいらっしゃいました。一人は私共と同じ位の年齢の方とみえたので、今日ここに一緒に来ている私の妻富子が、この方は日本語ができるのではないかと思ひ、声をかけたところ、覚えていらっしゃるって話が出来たのですが、その方が私共にラミネートで作られたブックマークをくださいました。それを見たら、「砕けて悟る十字架の道」と筆で書いてありました。私は「これはどなたの言葉ですか」と伺ったところ、その方は、これは内村先生の言葉で、自分が韓国の無教会の先生から学んだものだと言われました。

私は思い当たることがあって直ぐに調べたところ、それは内村鑑三が若い女学生に宛てた手紙の中に記されたもので、「病める若き友へ」という題が付けられていました。「欲うこと成らぬは成るに増すめぐみ砕けて悟る十字架の道」というそれだけの短い手紙で、封書で出されていて、その宛先は中島静江という人でした。私はわかったことを韓国のその婦人に知らせ、暫く文通を続けたということがありました。

さらに分かったことは、この中島静江は私の恩師山本泰次郎の夫人、活子の姉であることが分かり、私は非常に驚きました。私が山本先生に会ったのは51年、活子は50年3月に亡くなっています。ですから私はお目にかかったことはありませんでした。ただ告別式があって、告別の辞を、皆さんの多くの方がご存知の政池先生が述べられました。それは『聖書講義』の54号に載っていて、私はそれを読んだだけでした。

そういうことがあってさらに分かったことは、その封書の宛先、中島静江の結婚の相手が今日お話しする末永敏事ということでした。内村先生はこの姉妹をたいへん愛して、例えば、先生の生涯の友であったアメリカ人のデイビット・クーパー・ベルが日本に来た時には二人をパーティによんだり、自分の静養先の星野温泉に招待したりしました。先生は二人の結婚式の司式もしました。今井館には、

先生が「山本活子さんへ」と書いて贈ったギリシャ語の新約聖書、「この本にはキリスト教の真理が全てあります」と書いた欽定訳の聖書が保管されていると思います。

それほどに姉妹を愛しておられたということで、勿論先生は静江と末永敏事、活子と山本泰次郎の結婚式の司式もなさいました。

そのようなこともあって、私は非常に驚き、末永敏事のことを知りたいと思うようになりました。ちょうどその時、長崎新聞にこの人をテーマにした連載記事が掲載されていることを、今井館で教えてもらいました。私は関心を持ち、皆さんご存知の内村の研究者である鈴木範久先生を通して、連載がこの夏までには終わると聞いたので、どうしても読みたいと思い長崎新聞に電話しました。幸い執筆者の方が電話に出られ、直ぐに連載記事78回分のコピーを送ってくれましたので、読むことができました。連載は去年の10月初めに終わり、その年末には「平和・協同ジャーナリスト基金賞」の奨励賞を受賞しました。それを契機にして、記事は今年7月「花伝社」により書籍化されました。森永玲著『反戦主義者なる事通告申上げますー反軍を唱えて消えた結核医・末永敏事』です。

1. 末永敏事

皆様の中には既にお読みになった方も多くおられると思いますが、これからお話しすることは、全部この本に依っていることをご承知の上で、お聞きいただきたいと思います。

この本の序章にこのように書かれています。

「長崎県の島原半島・北有馬村今福生まれの末永敏事(1887～1945)という医学者がいて、世界の難敵だった結核を研究する先端にいたが、公然と反軍を唱え、敗戦のころ死んだという。そのまま世に知られることなく、年月のかなたに埋もれた。」

これが序章の第一文ですが、これによってこの人のことの全てが語られていると言っていいと思います。今私は特に彼の内村先生との関係を考えてみたいと思うので、彼の生涯を便宜上、前半生と後半生に分けました。

前半生は、内村の死（1930年3月）までで、内村との間に深い関係がありました。岩波書店の『内村鑑三全集』によると、書簡の部分ですが、そこには内村が

末永に宛てた書信が7通残っています。その他、日記に彼のことが2回言及されています。

末永は1887年に生まれて1945年死んだことになっています。郷里の中学校を中途退学し、1901年青山学院中等科に入学しました。おそらくその在学中に内村門下になったであろうと思われます。このことは高木謙次さんが、去年出た彼の『高木謙次選集』の最終第6巻「戦時下無教会信徒の動向—特高資料を中心に」の中で言うておられます。1912年長崎医学専門学校を卒業して医師となり、台湾で医師として働いたこともあります。その後16年に米国に留学しました。米国では「結核菌の抗酸性に関する研究」に、おもにシカゴ大学やその病院で従事した後、25年に帰国しました。この研究はのちに日本で博士論文として提出されたようがあります。内村は彼の帰国を喜んで日記に記しています。

そして先ほど申し上げたように、中島静江と結婚しました。この時内村はこのように言っています。

「此日、末永敏事と中島静江の結婚式を司った。末永は角筈時代よりの弟子であって、医学者として米国に十年留学し信仰を守って今日に至った者である。中島はキリスト教関係の出版社に勤め、優れたジャーナリストである。中島は過去八年間の忠実なる聴講者であった。純粹なる信仰的結婚であって、彼等の幸福と共に我等一同の幸福を祈った。」

結婚は26年6月2日で、内村はこの結婚を非常に喜びました。特にこの姉妹の父は中島滋太郎とって、当時の名士のひとりでした。帝国ホテルで披露宴がありました。帝国ホテルでやるような披露宴でないやり方のパーティに内村は非常に喜んで出席しました。そこに主賓として招かれていた東大医学部の部長林春雄のスピーチを英訳し、自分の英語の雑誌に“A CHRISTIAN WEDDING”と題して載せています。内村の喜びが伝わってくる、そんな結婚式でした。

29年長女範子が生まれました。内村が末永に宛てた7通の手紙の最後の手紙は29年12月28日付の代筆による葉書でした。この頃内村はもう自分で手紙が書けませんでした。手紙にはこのように書かれています。

「拝啓 御平安を聞いて喜びます。当方その後変わりありません。小生もどうやら健康を維持しております。天職のある間は生命安全と信じます。君の新たなご事業の上に神の祝福を祈ります。草々」

この頃内村は殆ど手紙を書けなかったもので、残っているのは数通しかない、その中の一通が敏事に宛てられたわけです。この後3か月足らずで内村は亡くなります。僅かしか書かれなかった手紙の一通が敏事に宛てられたということは、内村の末永に対する愛と信頼が非常に深いものであったということを示している、とって間違いのないと思います。

末永は当時錚々たる結核専門の医師でした。内村はあの「後世への最大遺物」という講演で、メリー・ライオンの言葉を引きながら、「人が嫌がる場所へ行け」と言いましたが、末永はこれに促されたのか、学会の先端に行く医師をやめて、故郷に戻って家業の医院を継いだようです。「君の新たな事業の上に神の祝福を祈る」という内村の言葉は、多分そのことを指しているのではないかと思われます。

ところが33年2月、末永は突然静江と離婚します。静江は娘範子と共に彼女の実家中島滋太郎の籍に戻り、そして敏事も故郷から姿を消しました。

その後の彼の後半生のことは、殆どすべて森永さんの著書に依って知るのみですが、この本を書いた長崎新聞編集局長の森永玲さんは、ひとつにはこうして消えていったような人に対する敬愛と、そして同時に、いかにも記者魂をもったジャーナリストとしての熱意をもって、とにかくいろいろなことを、よく人に会い、尋ねあて、また文献を探して、驚くような精細な成果をここに披露しています。

実は内村は末永に7通の手紙、最後の大切な一通をも出しているのに、末永のものは何も残っていない、書いたのかもしれないが残っていない。彼が姿を消した後、35年6月ですが、僅かに「内村先生のクリスチャンセンス」という小文を書いている。これは、先生の召天2年を記念して先生の弟子の藤沢音吉が発行した小さな雑誌に載っています。これを読むと彼の内村先生に対する敬愛の念がひしひしと伝わってきます。ここでは時間の関係で読みませんが、高木さんもその著書でそう記しています。

残っているもう一篇は「山吹の花」。これは山吹の花によせて、日本人にこう呼びかけています。読んでみます。

かの文明の狂奔を制する手綱

現代の不安と焦燥を安定するの要素は汝にあるにあらざるか！

勝たざれば、獲ざれば已まぬ現代精神

堪忍は無事長久の基

怒は敵と思へ

勝つをのみ知り負くるを知らぬ

身に害来ると教へたる

古人の歩みに劣るかな！

低けれど、小さけれど、少く人に見らるれど

斯くより深き所にて

汝に大なる世界あり、
汝に盡きぬ永劫あり、
日本の花の山吹の花
世界の花の山吹の花

(1935年4月)

この文について森永さんは、「文意はやや分かりにくい、文明の無節操を嘆きながら、その裏面で、国際的孤立に直面し、戦争へと向かう日本に自重を求めているようにも読める。その主張は、どこか能弁な印象もある。」と批評していますが、なるほどと思います。

末永はこの2つしか自分の書いたものを残していない。彼の考え、思想、平和主義は全部、皮肉なことですが、彼をいじめぬいたと思われる特高が彼らの文書、「特高記録」として残してくれています。

敏事のその後に戻りますが、敏事は離婚して全てを消した後、37年茨城県で内科医院を開業しています。これについては彼の無教会の友人だった蒲池信に手紙を出しています。その後に賀川豊彦の推薦で白十字会、これはキリスト教の医師たちが始めた医院ですが、その「鹿島保養農園」に入職しています。38年8月のことです。その時から彼の平和主義の信仰思想に基づく戦いが始まるということになります。

農園に入職して間もなく38年国家総動員法が公布され、それに基づき医師や大学教授などのプロフェッショナルの人たちは、自分の職業能力を申告する、国家の非常時に何が出来るかを申告することが求められました。この「職業能力申告令」に対して、38年10月末永敏事は自分は反戦主義者であることを申告したのです。高木さんの本に依って読んでみますが、

「特高月報 昭和13年10月号」に残された記録によれば、

「基督教信者の要注意言動として、茨城白十字会保養農園医師 末永敏事
当五十二年（彼はこの時52歳だった）

言動要旨 医療関係者職業能力の申告に関し、茨城県知事に対し次の如く申告を為せり（彼が書いた申告が残っている訳ではない。特高の記録として残されたもの）。「医師職業能力申告の徴集勤務の療養所医師として、入所の除隊兵及び兵士家族に必要な書類作成の如き事項に当面し、平素所信の自身の立場を明白に致すべきを感じ茲に拙者が反戦主義者なる事及び軍務を拒絶する旨通告申し上げます」。

このような申告をして、彼は直ちに特高に逮捕・拘禁されました。そこで彼はどんな批判を持っていたかをさらに月報によってみると、彼はこの申告をする前から、一緒に働いていた周りの人にこういうことを言っていたということです。

「日支事変は支那から仕掛けられて居るのでなく日本から仕掛けた侵略戦争である。現在日本の政治の実権は軍部が握って居る。近衛首相は軍部に乗ぜられて居る其の現われが日支事変である。軍部の方針は世界侵略を目指して居る。」

「今度の戦争は、東洋平和の為であると言うて居るが、実は侵略戦争である。戦争は御神意に反する事であるから戦争に賛成することは日本が亡びることに賛成する様なものだ。」

と言ったということも問題にされて、「基督教信者の陸海軍刑法違反被疑事件」として送検された。そして翌1939年3月、水戸地方裁判所において禁固3か月の判決を受けました。

自ら進んで反戦主義者であると申告した末永であるのに、彼はその原審、控訴審のいずれにおいても、認否を含めて一切弁明も証言もすることはなかった、と言います。

序でながら、彼が天皇批判、平民主義を主張したということについて申し上げますと、「小生軍備全廃論者であるが故に陸海軍人団と関係ある事を酷しく嫌ふ。次に自分は平民主義者であるが故に特権階級、例えば皇室、貴族、富豪などと何等の関係あるを拒絶する」。天皇についてこのように言ったので、送検の容疑の中には不敬罪も含まれていました。これに対して高木さんは、「今日からすれば、事態の進展を的確に把握し、天皇畏敬の念をユーモア化し、誠に勇気ある反戦平和主義者として注目すべき事柄である」とコメントしていますが、彼の言う通りだと思います。

さらにこの本の著者は、「特高の記録、末永が僅かながら書き残したものの、『山吹の花』などを読むと、彼の宗教的根拠による平和思想や文明批判はまさに内村譲りであり、その信条に迷いは感じられない」と言っています。これまた、その通りだと思いますが、では末永の反戦主義、反軍主義、平和主義はどこで培われたのかと考えてみますと、それは必ずしもはっきりしているわけではありません。彼自身はこういうことを教えられた、習ったということを何も残していません。しかし、彼が独り上京したのは1901年。青山学院の中等科に入って内村の研究会に出るようになった、そこで信仰を養うようになった。ちょうどその頃、日本は日露戦争を始め、内村は日清戦争の時の義戦論を翻して絶対的非戦主義、非戦論に立ちました。私は、末永が内村の非戦主義に大きな影響を受け、非戦論を培ったと考えるのが自然ではないかと思えます。

その頃内村が書いた非戦論は皆様よくご存じのもので、今日では非戦論の代表的なものである『戦争廃止論』、1903年に書かれた『平和の福音—絶対的非戦主

義』。その次の年には、私が今日の演題に使った、『戦時における非戦主義者の態度』。彼は日露戦争に反対して非戦論を唱えたが、残念ながら戦争が始まってしまった時に平和主義者はいかなる態度をとるべきかを論じた、この『戦時における非戦主義者の態度』という論文を出し、それに続いて『非戦主義者の戦死』。題だけを見ると恐ろしいような論文を発表しました。

内村はこれ以来一貫して非戦論者として生きました。彼の非戦・平和主義論の最終集大成と言うべきものは、26年に英語で書かれた『新文明 (NEW CIVILIZATION)』という論文であると言っていると思います。いずれにしても、彼は生涯非戦論に立って、生き、闘ったのであります。

甚だ不十分であります、末永敏事についてはこの辺りで終わりにしたいと思います。

2. 長谷川周治

今日私は、末永敏事のことを話したいと思ってお話に立ったのですが、その時に私はどうしても、もうひとりの人のことを話したいという気になりました。その人は私がよく知っていて、彼の最後に当たったの依頼により、私の手で彼の死亡の挨拶状をガリ版で書いてみんなに差し出した、そこまで一緒した長谷川周治（1884～1956）という人です。私のある尊敬する友人が、末永のことを考えると、彼が長谷川周治に会わなかったのは残念だったなと言ったことも、付け足しになりますが、長谷川のことを話したいと思った理由です。

長谷川周治は何よりも『内村鑑三先生御遺墨帖』を作った人です。内村先生はたくさんではありませんが、墨書したものを人にあげたりしている、そういうものを特に先程申し上げた藤沢音吉という、昔で言えば先生の車引き、先生の愛した弟子がたくさん持っていたのを、長谷川は集めて御遺墨帖を作りました。

長谷川はもともとゴムの製品を作る実業家でした。ですが戦争が激しくなるとすべては国策のためということで、普通の商売ができなくなってきた時に断然廃業しました。廃業後、彼は新たに「平和舎」の舎主になりました。当時“平和”という言葉は使えなかったが、敢えて「平和舎」という印刷会社を創り、この『内村鑑三先生御遺墨帖』を出版しました（1941年）。これにはたいへんなお金がかかったのですが、恐らく彼は財産をつぎ込んで出版したのだと思います。その後よく工夫して、数々有益な本を出版しました。

なぜ、末永と長谷川を並べたいと思ったのかは、先ほど申し上げたように、もし末永にひとりの長谷川がいたらと思われるようなことをしたのが長谷川なので、それを挙げたいと思ったからです。それは実は、内村が「戦時における非戦主義

者の態度」として、先ず挙げている事柄なのです。戦争が始まってしまって戦時になってもすることがあるのだ、それは、「先ず第一に、絶対に平和主義・非戦主義を曲げないこと、第二に、平和を進める時期は当分来たらず、さればとて戦争を簡単に止めることはできない、それならば私共平和主義者は、今は茫然として手を束ねているのかということ、決してそうではない。ここに今、今日私共にとって、最も相応しい一つの事業が具えられている。それは、出征兵士の遺族の慰問である」。戦争のために苦しんでいる人を慰問することだ、こちらにそれだけの余裕と力があれば、それが非戦主義者のなすべきことだと、内村は言っているのです。私はそれを思って本日の題にしました。それを実行した人として長谷川周治のことを紹介したいと思いました。

長々とは申し上げられませんが、長谷川周治が慰問した何人かの例を年代順に揚げていきたいと思えます。

第一は政池仁先生です。政池先生自身がご自分の雑誌『聖書の日本』に書いておられますが、ここは高木さんがよくまとめてくださっているので、高木さんに教えてもらおうと思えます。

長谷川周治はこの時期、発禁処分を受けた無教会の独立伝道者を多く助けた。政池仁著『キリスト平和論』の再版費用を負担し、この本の発売禁止及び罰金に対して費用の肩代わりをした。警察の留置場に拘束されている浅見仙作の見舞いと励ましのために、はるばる北海道に出向いた。また、鈴木弼美と渡部弥一郎の拘置見舞いのために山形まで出向いている。

次に、エスター・バウアー、アン・パフ、グレース・ファーナム。この三人は宣教師ですが、42年国外退去を命じられて、一時収容所に入れられました。長谷川周治は旧知のこれらの宣教師を収容所に訪ね、彼らが必要としていたと思われるもの、果物、牛乳、バターなど当時なかなか手に入らなかったものを探して、それを持って見舞いました。敵国の民をです。

序でながら、グレース・ファーナムは、私が7年間教会にいた時のキリスト教の大切な先生でした。同時に私は、キリスト教を信ずることについては彼女と全く同じでしたが、信仰の在り方やキリスト教の仕事をしていくその仕方について、意見を異にして別れなければなりませんでした。

三人共戦争が終わったら直ぐに日本に来て、宣教を開始しました。長谷川周治はそういう敵国の彼らを見舞っていたのでした。それに、いつも付いて行ったのは娘の岩井静枝でした。静枝さんは昨年お亡くなりになりました。今日はその娘さん、長谷川周治のお孫さんの恵さんが来ていらっしやいます。

イシガ オサム。彼は著書『神の平和一兵役拒否を越えて』の中で書いています。彼は九州に居たが、東京の憲兵本部に呼ばれて留置されました。最後は罰金刑を受けて釈放されましたが、その時たびたび留置所に慰問したのは長谷川周治でした。彼は釈放後長谷川宅に迎え入れられた。その後、イシガ オサムは矢内原忠雄にも会って九州に帰って行ったと、彼の日記に書かれています。

鈴木弼美と渡部弥一郎。渡部弥一郎さんが書いた『吾が回想の記』に詳しく書かれています。鈴木先生と渡部さんのことについては、「キリスト教独立学園」の関係の方がよくご存知のことでありまして、今日は省略します。

渡部弥一郎の三男として生まれた渡部良三。ここに小さな本をもってきました。『歌集小さな抵抗』という歌集で、1992年に私家版として出され、最後に「岩波現代文庫」に入りました。これはきっと多くの方が読まれてご存知と思います。これには渡部さんの講演も載っていて、彼の気持ちがよく分かります。私も何回かお宅に伺って話を聞いたのですが、末永敏事とは違った場所で同じような生き方をしたともいえる人ではないかと思えます。彼は歌集の最後の方に、復員してきた後のことですが、「1946年（昭和21年）博多に上陸。川崎市の長谷川周治先生宅に数泊お世話になり、3月21日春分の日、故山生家の門に入る」と書いています。渡部は山形の家に戻る前に長谷川に会いに行ったのです。

長谷川周治という人はそういう人でした。彼は義侠心の強い人で、とにかく弱い人や困っている人を見ると、黙っていられない人でした。私の個人的なことになりますが、私が教会を出た時、生活の心配をしていろいろと助けてくれました。案外私共クリスチャンはお金のことを考えないのです。お金のことを考えるクリスチャンは、私は本物だと思っていますが、そのひとりこそ長谷川周治でした。

序でながら、長谷川の内村に対する敬愛はただならぬものがありました。内村聖書研究会に列なることはありませんでした。

3. 日本友和会の二人の先達

私の話はこれで終わりなのですが、こういうことをいろいろと勉強していくとき、私はどうしても戦争中に生きてきた二人の人を思わないわけにはいきませんでした。それは「日本友和会」における私の先輩で、戦争に深く関わった人たちです。「日本友和会」は結成90年になる古いキリスト教平和主義の団体です。

ひとりには中川晶輝（1917～2006）。中川は1917年生まれで、偶然にももうひとりの石原正一も同じ年生まれです。

中川先生は、『ある平和主義者の回想』を書いています。彼は医者として戦時中一貫して平和主義に徹し、絶対に人を殺さない、武器をもたない、それを医療の力として軍医として勤めた。そして戦後は中国の人たちのために残って働いて、帰国してからは、戦犯の拘置所などで働きました。そして、医者として早くに老人問題に取り組んだひとりです。また、多くの平和運動に関わった、尊敬すべき平和主義者のひとりです。それに付け加えれば、尊敬すべき教会人でありました。なお、私は中川先生の紹介で1978年に日本友和会に入会しました。

もうひとりには石原正一（1917～2010）。私は石原さんとは随分早くに会っています。1972年無教会の聖書の勉強会に加わるようになったばかりの頃に、夜間講座の出張講座で静岡に行き、そこで石原さんにお目にかかりました。そこはご存知のように政池先生がずっと伝道に行っておられたところでもあります。

その後、石原さんとは日本友和会で再会しました。石原さんはご存知のように、自分が中国で戦争に加わざるを得なかった罪責を覚えて、ずっと軍人恩給の受給を拒否、またいわゆる良心的軍事費支払い拒否の運動に関わりました。

私にとっては、1988年から90年にかけて、その良心的軍事費支払い拒否の裁判を、弁護士無しの本人訴訟で起こした時、裁判の傍聴に、石原さんは遠いところを何度も来て応援してくださった。忘れることができない事です。

もうひとつ石原さんのことで採り上げたいのは、『花巻非戦論事件をめぐる石原正一・武藤陽一往復書簡』。これは石原さんが岩島公先生に招かれて平和講演会をした時に、内村の「花巻非戦論事件」を取りあげられました。内村が先程の非戦論、絶対的平和主義を教えた時に、それに応じて徴兵拒否をしようとした人がいた。斎藤宗次郎という人です。内村は、彼が徴兵拒否を決心した時にたいへん心配し彼のところに直ちに赴いて、「君がそれをするのはたいへんなことなのだ。君の家族がどうなるかを思いなさい。徴兵拒否することが必ずしも非戦主義者がしなければならないこととは限らない」と言い、さらに「しかし、君がどうしてもそうしたいのなら、君の良心に従ってしなさい」と教えたという事件です。

斎藤宗次郎は後に「花巻非戦論事件」として証言しているのですが、それを取りあげて特に大切なこととしたのは私の恩師の山本泰次郎でした。それを読んで石原さんは疑問に思うことがあって、私に「あなたは山本の弟子だけれど、この問題をどう思っているか」と丁寧な手紙をくださいました。私は私なりに一生懸命に考えてそれに答えました。内容は長くなるので今日は申し上げますが、お互いに心から自分の考えを出し合って、お互いに納得できるような書簡の往復が

できた、それによって、お互いに平和主義に立つ者として友情を深めることができた。これは私には忘れられないひとつの出来事でした。

石原さんとはその他、沖縄では「一坪反戦地主」として、中国では南京での「緑の贖罪」植林旅行にご一緒したこともあって、非常に懐かしく思い出される人です。

おわりに

これで私の話は大体一通りできたかと思うので終わりますが、終わりにということでは何か結論じみたことを申し上げなければならない気もしますが、そういうことはございません。先程も申し上げたように、大分毫碌している頭で、何とかここまで来ただけでもよかったと思っています。

それでも話を終わるに当たって、3点申し述べることをお許し下さい。

(1) 戦時における非戦主義者の態度の多様なこと

「戦時における非戦主義者の態度」には、しっかりとした一本の筋はあるのだけれど、実際にどのように生きるか、いかなる態度をとるかについては、いろいろな生き方が、いろいろな態度があるのではないかと、言うことに尽きるように思います。

(2) 「戦時」とはいつかーアモス書5章から考える

ひとつだけそこに書きましたアモス書の5章。私は教会を出た時に、聖書を学ぶ小さな集まりを友人たちと始めました。1956年9月の第一日曜日でした。山本泰次郎先生が「キリスト教はどのようにして始まったか」という開講講演をして下さいました。集会は細々と60年余続いているのですが、普通このような名前は無いので「あなたの集会の名前のテコアとは」とよく聞かれます。ご存知のように、「テコア」は預言者アモスの生地、出身地です。ちょうどその頃私共はアモス書の5章の辺りを勉強していました。

その5章に不思議な言葉があります。

彼らは町の門で訴えを公平に扱う者を憎み
真実を語る者を嫌う。

お前たちは弱い者を踏みつけ
彼らから穀物の貢納を取り立てるゆえ

切り石の家を建てても
そこに住むことはできない。
見事なぶどう畑を作っても
その酒を飲むことはできない。

お前たちの咎がどれほど多いか
その罪がどれほど重いか、わたしは知っている。
お前たちは正しい者に敵対し、賄賂を取り
町の門で貧しい者の訴えを退けている。

これは、今日の時代でも同じであるし、内村が非戦論を唱えた20世紀の始めも同じであるし、末永敏事が特高に追われていた時代も同じことでした。ですからアモスはこのように言います。

それゆえ、知恵ある者 (the prudent) はこの時代に沈黙する。
まことに、これは悪い時代 (the age of evil) だ。

これはみなさんどうお感じになりますか。「時代は悪い、知恵ある者は沈黙する」— “なんだ、我々が今読んできたのと反対ではないか”、と思われませんか。そうかも知れませんが、いや、そうでないかも知れませんが、どうぞお考えください。

「知恵ある者は悪い時代に沈黙する」。アモスは何を言おうとしているのか。考えてみれば、戦時における非戦主義者の態度と言いますが、「戦時」は悪い時代であることは確かですが、考えてみれば、私共にとってはいつもが戦時ではないですか。この世はなお神に敵する者が跋扈する、そういう世、そういう時代、悪い時代、それが「戦時」ではないですか。そうであれば私共にとっては“常在戦場”ということになります。「生くるは戦うなり」です。私たちの戦いは、しかし武器をもって戦うのではない。平和のしるしをあげて、そして正義のために、神をおそれることを学ぶために戦うのであります。

(3) ヘブリー・ネットワークのめぐみ

私は昭和大戦後の人生模索の中でキリスト教に出会い、様々のいきさつを経て、1949年2月、自分はこれからキリスト教の仕事(伝道)をして生きていこうと決心しました。それから今日まで、内村の言葉で言えば「信者の生涯の結実」の年齢に到達しつつあります。「信者の生涯の結実」、内村は「信者の生涯は信者の心の中に何かある結実を持つことができるのだ。だから信者にとっては the last is the best、最後が一番いい」と、教えてくれているのですが、私もそうし

た結実を少しは感じさせられる歳になって、自分はどんな結実をここに迎え得たのかと思わないわけにはいかない。本当に弱い、何もできない、神の前に罪ある者で、神の栄えのために働くことなどおよそできなかった。にも拘わらず、こうして畏るべきものを恐れ、この悪い時代にも神の支配は確かにあることを信じて、生きてくることができた、そういう結実は何であろうかと思うと、私は今日人の名前をずっと挙げてきましたが、正にそれでした。私は実にありがたいことに、よい人ばかりに出会ってきたという気がします。本当にありがたいことでした。たくさんの良き先輩、そして良き友人たちに出会って今日まで生きてくることができました。

老子の有名な言葉に「天網恢恢疎にして漏らさず」というのがありますが、これは、いかなる悪人でも、天の目は厳しく見ていて決して逃れることはできないという意味ですが、この「天網」という言葉を借りて、老子が言ったのとは全く反対に、「heavenly network」天網（天の父なる神の網）は、本当に広く、深く、そして実に細やかであって、私共はその天網に決して漏れることなく、しっかりと支えられて、こうして生きている、生きて来たのだということを思って、そのめぐみを感謝せざるをえない、と申したく思います。

さて最後に、末永敏事は服役、出獄後、急速に軍国主義化していった祖国にあって、しかもその最も「悪い時代」（31年満州事変、37年日中戦争、41年太平洋戦争）に、堅く反戦・反軍の志を抱いて、どこで、どのように生き、そして死んだのか。恐らく「治安維持法」の被害者の一人として、「そのまま世に知られることなく、年月に埋もれた」のでありましょう。

それでも私は、彼にもまた、この heavenly network の繋ぎ目が必ずあったということ信じたいと思います。一回だけ彼が現れたという記録があります。それは、1943年彼の幼なじみのところに現れた。それもみじめな、顔に怪我をして、ぼろを纏って、多分特高に尾行されて後ろを窺いながら、幼なじみと会って逃げるように出て行ったと言う。その息子がそれを覚えていて、その孫が記録をしていて、それが今回の「末永敏事の記事」の一番の発端になったというのであります。私はそういうことを伺って、決して彼が彼の heavenly network から漏れたわけではないと、心からそう信じたいと思います。

ご静聴有難うございました。

（2017年9月23日キリスト教独立伝道会の「2017キリスト教平和講演会」で述べたもの）

〔参考文献 一話の順序に従って〕

- 森永 玲『反戦主義者なる事通告申上げますー反軍を唱えて消えた結核医・末永敏事』（花伝社、2017）
- 高木謙次『高木謙次選集』第6巻 戦時下無教会信徒の動向ー特高資料を中心に（キリスト教図書出版社、2016）
- 『内村鑑三全集』第11、12、日記・書簡巻（岩波書店、1984）
- 長谷川周治（武藤陽一編）『偽らざるの手記ー或るクリスチャンの一生』（私家版、1957）
- 武藤陽一「長谷川周治ー平和に生きた前垂れがけの武士」（共著、無教会史研究会編『無教会キリスト教信仰に生きた人びと』（新地書房、1984）
- 政池 仁「弱者の友長谷川周治氏を憶う」（『聖書の日本』第246号、1956）
- ジョン・ヤング『宣教師が観た天皇制とキリスト教』（燦葉出版社、2005）
- イシガ・オサム『神の平和ー兵役拒否を越えて』（新教出版社、1971）
- 渡部弥一郎『吾が回想の記』（富樫 徹、1978）
- 渡部良三『歌集 小さな抵抗』（岩波現代文庫、2011）
- 中川晶輝『ある平和主義者の回想』（新教出版社、2002）